



OVERWATCH®
DEADLOCK
REBELS



第一章

作 LYNSAY ELY

★ 第一章

一度足を踏み入れれば、なかなか抜け出せなくなるのがトラブルというもの。避けようとしても、逃げようとしても無駄。アッシュがボニー兄弟にそうしたように、抗ってみせるのもひとつの手だが、結局はどこかでまた巡り会うことになる。

「呆れて物も言えんよ、エリザベスよ」

カーソン保安官の口髭には何かの食べカスがついていた。ほんの僅かではあるが、確かにそこにある朝食の残骸がどうしても気になって仕方がない。

「何度こうして顔を合わせなきゃならんのだ」

「だから言ったじゃない……」

アッシュは歯を食いしばり、絹のスカートをぎゅっと握りしめている。数時間前までは汚れひとつなかったスカートの、今は皺苦茶なうえ、ところどころに血がついている。もちろん、アッシュのものではない。

「自己防衛だよ。向こうが先に手を出してきたんだ」

保安官が溜め息をつくとき、髭に留まっていた食べカスがアッシュの経歴を映し出すディスプレイめがけて落ちていく。

「彼らの証言と噛み合わん」

「なら、あいつらが嘘つきでいじめっ子ってことだね」

保安官は彼女の言葉を信じていない。それは髭の食べカスを見るよりも明らかだ。ただ、彼がアッシュの言葉を訝しむのも当然と言えば当然で、想定範囲内だった。しいて驚くようなことがあったとすれば、あまりに早く最悪の状況へと発展していったことくらいだ。

始まりはまだよかった。

普段のアッシュなら、家を出なければならぬ時間の5分前に、執事ロボットのボブに毛布を引っ剥がされようやく起きだす。最新鋭の知覚を持ったオムニックであるボブは、彼女が物心ついたところからずっとそばに仕えてきたボディガード兼友人で、彼女を無事に学校に送り出すのも仕事のひとつだった。だが、今朝だけは彼の手を借りずにすんだ。

今日は特別な日。卒業式だった。そこにいるだけで魂を吸い取られそうなほど息苦しかったアカデミーとも、今日でお別れだ。アッシュに卒業は無理だと決めつけてきたイタチ顔のワラッチ校長が、卒業証書を手渡してくる表情を見るのが楽しみだった。両親も同じ表情を浮かべているはずだから、壇上を横切る時に見てやろう。

アッシュはお風呂に入って着替え、雪のような髪をつやつやになるまで梳かした。それから、一族が代々暮らしてきたリード・ローズ邸の階段を1段飛ばして降り、両親がいつも朝食をとるダイニングルームに向かった。

しかし、そこには誰もいなかった。湯気が立ち上るコーヒーカップも、延々と営業報告や売上の数値を映し出すホロビデオもなければ、両親の姿もない。

マホガニー材のダイニングテーブルの上に、純白のバラが生けられた花瓶がひとつ置かれているだけだ。花瓶にはメッセージカードが立てかけられていた。

——エリザベス、卒業おめでとう。あなたは私たちの自慢の娘です！

両親からの温かい言葉は、みるみるアッシュの体温を奪っていく。部屋からすべての色彩が消え、まるで目の前のバラのように真っ白になっていった。

——卒業式には出席すると約束しましたね。ところがつい先程、非常に有望な合併の話が持ち上がり、そちらに向かうことになりました。あなたが立派に卒業の日を迎え、本当に誇らしく思います。今日あなたは、過去の過ちや問題と決別し、一族の遺産を担う者として歩み始めるスタートラインに立つのです。

カードに署名をする時間も惜しんだらしい。アッシュは顔をしかめた。「自慢の娘」ね……。

冗談のつもりだろうか。全く笑えない。それほど誇らしいなら、今ここにいなさいよ。どうしてまたその娘を独りにする？ 何が「一族の遺産」なの。馬鹿らしい。

そういった思考を巡らせ立ち尽くすアッシュを、部屋の反対側の壁に掛けられた何代前かもわからない先祖、カレドニアの肖像が無表情で見つめていた。カレドニアはアルバレスト・アームズ・カンパニーの創設者で、最高峰のハイテク兵器ディーラーの基礎を築き上げた人物だ。ヘリックスやヴィシュカー、ハイド・グローバルなどの大企業の幹部とつるみ、自分たちが勝ち取ったわけでもない評判を担保に取引をしているアッシュの両親とは訳が違う。もっとも、彼らの運だけはよかったのかもしれないが。

カスタム性に富んだ高級ライフルの製造会社として何年も成功を納めてきたアルバレスト社は、オムニック・クライシス勃発とともに軍の目に留まった。マガジン容量と銃口速度に優れたAA92ライフルは軍の標準装備として採用され、その契約とともにアルバレスト・ブランドのライフルの需要も爆発的に伸びたのだった。商売において戦争は追い風となる。それが遠くで起きているならなおさらだ。

確かに大都市では戦火が広がっていたが、リード・ローズ邸とアルバレスト本社のあるベルレイは孤立した地域で、クライシス以前に暮らしていたオムニックもせいぜい十数体だった。戦争の間もほとんど被害を受けることがなく、製造工場は順調に兵器を生産し続けた。

しかし、オーバーウォッチの活躍によりクライシスが終息すると、武器の需要は低迷し、アルバレスト社はベルレイの工場をひとつ閉鎖するに至っていた。アッシュの両親は、先祖代々の稼業で発展させてきた地元ではなく、何千マイルも離れた土地で契約を結ぼうと躍起になっている。こんな現状を、遺産と呼べるだろうか？

肖像画の下には、代々伝わるヴァイパー・ライフルが掛けられている。アルバレストの初期モデルで、社の兵器市場での存在感を示すきっかけになった名品だ。100年経った今でも新品同様で、撃てば弾をまっすぐ飛ばせる。革新と品質、それこそがカレドニアが追及していた本当の遺産だ。彼女は手当たり次第に優秀かつ聡明な人材を雇い、家族のように大事に扱った。おかげでアルバレストは決して他社に遅れをとることなく成長できた。カレドニアは社員を大事にはしていたものの、決してお人好しというわけではなかった。自身のことは必ず「ミス・アッシュ」と呼ぶよう社員に指導していたといわれている。敬意を示せ、ということだったのかもしれないし、単に「カレドニア」という名前が嫌いだったのかもしれない。エリザベスもまたその名前を嫌い、姓である「アッシュ」と呼ばれることを好んだ。

重厚な足音が近づいてくる。振り向くと、ダイニングルームの入り口にボブが立っていた。巨大な金属製の手にはトレーが器用に乗せられている。シロップが滴るワッフルに、とびきりカリカリに焼き上げたベーコンがどっさり——アッシュのお気に入りの朝食メニューだ。喉元に、酸っぱいものがこみ上げてきた。

「今、お腹空いてるように見える？」

噛み付くような言葉を投げかけられたオムニックは、目をパチクリとさせトレーをテーブルに置いた。アッシュはすぐさま罪悪感にかられた。ボブはなんにも悪いことはしていない。戦争中に姿を消してしまっ

た時期を除けば、ボブはこれまでの人生で彼女が頼れる唯一の存在だった。オムニック・クライシス中、ボブも他のオムニックと同様に行方をくらませていた。そのまま月日は流れ、アッシュはもう彼には会えないものかと思っていた。オムニックの執事がいない日々は驚くほど寂しかったのを覚えている。戦争が終わった後、リード・ローズ邸に戻ってきた彼は知覚を持っていて……まるで別人のようになっていた。具体的にどこがどう変わったのかは、アッシュも未だにはっきりとはしなかったが、彼は戻ってきてからもずっと、彼女に寄り添ってくれている。両親とは大違いだ。

「行くならそう言うてくれてもいいのに……」

虚しく響く言葉に気が立ち、両親にも自分にも苛立ちを覚えた。二人が何も言わずに彼女を置いていったのは初めてではないし、これが最後だとも思えない。物心ついた頃から——特にボブが不在だった数年間は——広大な邸宅は静寂に包まれていた。そうでないときは、アッシュがなにか両親の意にそぐわない問題を起こし、屋敷に非難めいた空気が漂っていた。

アッシュはカードを握りつぶした。どうして今日はこんなに苛立つのだろう。今日はいつもとは違うはずだったから？ 両親にとって、アッシュの卒業式には何か特別な意味があるようだった。学校一のハッカーに彼女の成績をオールAに書き換えさせたり、化学実験室でスリングショットを見せびらかしたせいで汚染除去のため学校を封鎖に追い込んだりした娘が、単なるトラブルメーカーではないと世間に知らしめる絶好の機会だと考えていたのかもしれない。あるいは、やっとアッシュが何かを成し遂げられると、そう信じるきっかけになると思っていたのかもしれない。アッシュ本人は、後者であることを望んでいた。彼女は必ず卒業すると誓い、両親は卒業式に出席すると約束した。アッシュは愚かにも、二人の言葉を信じてしまった。

テーブルの上のバラは朝日を浴び、まるで標的のように輝いて見える。もしヴァイパーに弾が込められていたなら、このまま両親からの贈り物に狙いを定め、木々端微塵に舞うガラス片と花びらを眺めていたかった。アッシュはカードを炉棚に放り、足を踏み鳴らして廊下に出た。すれ違いざま、ボブが腕を伸ばして彼女を制止する。アッシュは溜息をついた。

「大丈夫。ちゃんと式には行くから！」

ボブが首を傾げた。

「車はいい。歩いてく……ひとりで」

オムニックは警告するように手を挙げる。

「はいはい。ダメだってのはわかってる」

今のアッシュは、いかなるルールにも従う気分にはなれない。

「ねえ、ゴールドのプレスレットを取ってきてくれない？ ほら、去年の誕生日に親が買ってきやつ。着け忘れたの」

ボブは素直に振り向き上階へ向かった。普段なら彼が学校まで送り届ける役目を務めるのだが、今日はどうしてもひとりになりたかった。そこでアッシュは、ちょっとした嘘で彼の注意をそらした。プレスレットは、母親が何ヶ月も前に借りたまま返してくれていない。探しものはアッシュの部屋にはないとボブが悟った頃、彼女はとっくに家を出ていた。

アッシュは川沿いの道を歩いて街に向かった。期待したとおり、誰もいない。他に動いているものといえばアヒルと、ときおり飛び交う警察の監視ドローンくらいだ。しかし、ひとりで静かに歩いても機嫌は直らなかった。友達に連絡して愚痴を聞いてもらうわけにもいかない。名家のご令嬢という立場は、いつでも同じ年頃の子供たちを遠ざけてきた。その上、最近アルバレスト社の工場が閉鎖されたことで、相当数のクラスメイトの家族が仕事を失っていた。今まで彼女をなんとなく避けていただけの同級生の一部は、嫌悪感を露わにするようになり、学校での揉め事はこれまで以上に増えていた。だからこそ卒業式とともにアカデミーを離れる日が待ち遠しかった。

まだ機嫌は悪いものの、川辺を飾るように植えられた街路樹の下を歩いていると、呼吸が少しだけ楽になったような気がした。屋敷での息が詰まるような孤独感を忘れ、どこか別の場所で、別の人生を歩んでいるつもりになった。

「おい、朝から珍しいのがいるぞ」

アッシュは足を止めた。先程までの安らかな気持ちは消え失せている。振り向く前から、誰が迫っているのかはわかっていた。アカデミーの一学年後輩、ジョディ・ボニーとジミー・ボニーの兄弟だ。ベルレイでもアッシュとその家族をここまで憎んでいる者はいない。何十年もアルバレスト社で働いてきた彼らの両親は、工場の閉鎖とともにこともなげに放り出されてしまったのだ。

「ありゃ世にも珍しい赤目のクジャクだな、ジョディ。いつもならデカブツの執事ロボにお守りしてもらってんのかな」

にやけた顔でジミーが口を開く。最悪だ。今はまともにこいつらの相手をしてやれる気がしない。

「さっさと失せなよ。今は気分が悪いの」

「つれないこと言うなよ」

ジョディはそう言い、兄弟は意地の悪い笑みを交わした。嫌な感じがした。二人は彼女より年下だが、体は向こうが大きかった。

「今日卒業すんだろ？ おめでとう！ なあ、親御さんはそのために、一体いくらアカデミーに寄付したんだよ？」

アッシュは苛立ちを顔には出さないようにした。

「さあね。ワラッチ校長に、あんたらみたいな頭スッカラカンの救いようのない馬鹿を卒業させてって頼むよりは安いんじゃない？」

ボニー兄弟は揃って顔をしかめた。

「かしこぶりやがって」

「金持ちだからって、人を見下していいと思ってんのか？」

ジミーに嘲笑され、アッシュは体が熱くなるのを感じた。アドレナリンが体中を駆け巡り始めた。彼女は憐れむような笑顔を浮かべる。

「まったく、何言ってんだか。あたいが薄汚れた貧乏人だったとしても、あんたらより余裕で頭が切れることには変わらないね」

言うべきではないとは思ったが、我慢できなかった。これ以上ないほどフラストレーションを溜め込んだ彼女にちょっかいをかけたのは兄弟のほうだ。ジョディの声が剣呑さを帯びる。

「薄汚れた貧乏人、ねえ」

彼は地面から土をひとつかみ拾い上げた。

「ジミー、こいつに薄汚れた貧乏人の気持ちを味わわせてやろうぜ。きれいなクジャクの羽根を汚してやれ」

アッシュは笑顔を浮かべたまま背筋を伸ばした。二対一の喧嘩など、どうということはない。ジミーが彼女を掴もうと足を踏み出したが、頭の回転だけでなく、動きも遅かった。アッシュは彼に蹴りをお見舞いし、すぐさま手の届かない位置まで飛び退いた。脛を蹴られたジミーは悲鳴をあげ、芝生に転がる。

身のこなしの早いジョディが、アッシュの腕を掴み引き寄せる。抱き込んで動きを封じるつもりだったのだろうが、彼女はすんでのところでしゃがみこみ、みぞおちに肩を打ち込んでやった。ジョディは息をしようとあえぎながら後ろによろめいた。隣にはようやく立ち上がったジミーが顔を真っ赤にしている。

「もうおしまい？ あたいもヒマじゃないんだ」

アッシュが唾を吐き捨て挑発すると、ジミーが雄叫びとともに拳を振り上げ突っ込んできた。当たれば脳震盪でも起こしそうな大振りなパンチを一発、二発とかわす。アッシュはパンチの避け方も、打ち方も心得ている。

相手の隙を見極め、拳を突き出す。口元を打ち据えられたジミーは、血を吐き出し、膝をついた。それを見たジョディは低く冷たい声でアッシュを脅す。

「てめえ…… 調子に乗るなよ。服を汚す程度じゃ済まさないぞ」

彼の手には銀色に光るものが握られていた。ナイフだ。アッシュは身構え、一步後ろに下がった。あそこまで挑発したのは悪手だったかもしれない。こうなるとただの取っ組み合いでは済まない。

怒りで我を忘れたジョディは、聞く耳を持たない。ナイフを構えて突進してきた彼を横に避けてかわし、刃物を持つ手の手首を掴んで肘を振り上げる。小気味のいい音とともに彼の鼻を直撃した。ジョディはナイフを取り落とし、ジミーとともに地面に倒れこむ。アッシュはすかさずナイフを拾い上げ、構えながら二人か

ら離れた。

すると、サイレンが鳴り響き、ランプを光らせたベルレイ警察のホバーバイクが二台その場に駆けつけた。警察のドローンに喧嘩の様子が捉えられたのだ。それに気づいたアッシュが振り返ると、三台目が彼女の背後につけた。

「動くな！」

保安官代理は彼女にライフルを向けながらバイクを降りる。アッシュは悪態をつきながらナイフを地面に落とした。卒業は諦めるしかなさそうだった。

「部下から聞いたが、武器を持っていたそうだな」

カーソン保安官はしかめっ面のまま話を続ける。

「二人の少年も、君に襲われたと言ってる」

「状況だけ見ればそうね」

アッシュはありったけの自制心を働かせながら、悪意のない笑みを浮かべ、牙を隠しながら弁明しようとした。嘘つきの兄弟を絞め上げる想像をせずにいるのは至難の業だった。

「あたいの話も聞いて——」

「いい加減にしろ！」

保安官は机を叩いた。

「エリザベス、君はいつだって言い訳ばかりだ。どうせ、好き勝手に振る舞っても、家の名前を出せばお咎めなしだとも思ってるんだろう？」

「まさか。そんなこと——」

「今回はそうはいかん！」

保安官は唾を吐き捨てた。

「立て！」

「何すんのさ!？」

腕を掴まれ無理やり立たされたアッシュは抗議の声を上げる。

「しばらく反省してもらおう。少しは謙虚さというものを覚えるがいい」

保安官は彼女を引きずるように事務所から連れ出し、廊下の先にある薄暗い一角へと連れて行った。監房のある区画に入るのはアッシュも初めてだった。

「ちょっと、勘弁してよ。そこまでやることないじゃない。ポブに連絡して。すぐに迎えに来させるから——」

「ああ、そうか」

牢の鍵を開け、アッシュを中に押し込んだ保安官の口元には、どこか満足げな笑みが浮かんでいる。

「また親御さんの金で解決するつもりか。街の半分は一家の所有物だし、誰も文句を言わないとでも？」

今回はそうはいかん。幸い時間ならたっぷりある。未成年は自分で自分の保釈金を払えないんだ。だから後で家に連絡してやるよ…… それまで、監房の中をじっくり見ていくといい」

扉が勢いよく閉まった。

「ねえ、待ってよ——」

努めて冷静でいようとしていたアッシュだったが、去っていく保安官の背中を見て取り乱す。

「ちょっと！ いいからこっちに戻って来い！」

保安官は鉄格子にすがりつくアッシュの叫びを無視して行ってしまった。彼女の言い分は聞いてくれないだろう。いつものことだ。このどうしようもない街の住民はみんなそう。両親でさえも、アッシュがどんな人間なのか決めつけている。わがままなお嬢様。トラブルメーカー。一族の誇りを脅かす存在。彼女自身がどう思っているかなんて、彼らには関係ない。

「へえ…… 金持ちのお嬢様にしては骨があるな」

背後から知らない声が聞こえる。アッシュは声の出どころに顔を向けた。

「……何て？」

隣の監房に、ひよろっとした人物が横たわっていた。壁に取り付けられたベンチに足を乗せ、顔の上に

帽子を被せている。

「そんなきれいな服を着てるんだ、金持ちに決まってる」

声は低く、調子のいい口ぶりだ。

「ほっといてくれる？」

声の主はくつつつと笑った。

「どうしてまた、こんなところに来たんだい？」

「好きでいるみたいに言わないで。あたいはここにいるべき人間じゃないんだ」

帽子が押し上げられ、にやけた青年の顔が現れた。すべてを見透かすような茶色い目の片方は、痣ができて腫れ上がっている。

「奇遇だな。俺もだぜ」

「へえ？ そんな派手な痣を作って、よく言うね」

「ああ、これのことか？」

青年を起き上がって顔に触れる。

「ダチが誤解されて、他の農場の使用人と揉めてたんでな…… 止めに入ったんだ」

「なのに、あんただけここに入れられたのね」

「あいつはもう、警察に目を付けられちまってるからな」

青年が肩をすくめ軽く答えると、アッシュの苛立ちは驚きへと変わっていった。

「その人を庇って殴られて、逮捕までされたってこと？ ずいぶんお人好しだね。馬鹿なの？」

「ジュリアンはダチなんだ。大事にしてやらねえと」

青年はゆっくりと引き締まった体を伸ばしながら立ち上がった。

「そっちはどうだ？ どうしてここに入れられた？」

「似たようなもんさ」

アッシュは慎重に答えながら、改めて青年を観察した。年齢はあまり変わらないようだ。もしかすると、向こうが年下かもしれない。それでいてもうすでに世間の荒波に揉まれてきたような雰囲気があった。

「全部、誤解だ」

「じゃあ、俺たちは似たもん同士だな」

彼はお互いの監房を仕切る鉄格子に近づき、手を突っ込んできた。

「名前は……？」

アッシュはほんの一瞬だけためらった。一度心当たりができてしまえば、何度となく顔を突き合わせてしまうのがトラブルというもの。ポニー兄弟に比べたら、彼はまるで懐っこい子犬のようだ。アッシュは彼の手を取り、握手を交わした。

「アッシュって呼んで。あんたは？」

青年のにやけた笑みが深まった。

「ジェシーだ。ジェシー・マクリー」





